

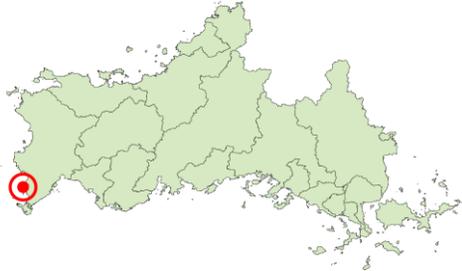
磯根資源に有用な藻場の回復をめざして

下関ひびき藻場保全グループ

下関ひびき地区について

下関ひびき地区は、山口県の西部に位置する下関市にあり、響灘に面す。海岸線には砂浜が広がっており、海水浴や散策、夕日のスポットとして多くの市民が訪れる。

産業は農業や漁業が地場産業として根付く。また市街地に近いことから宅地化が進んでおり、生活拠点としての商業施設も多く建ち並ぶ。

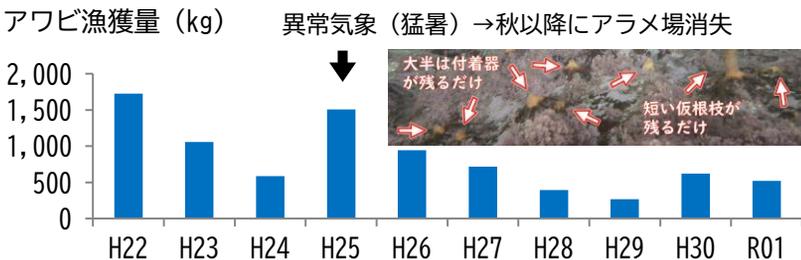


藻場の現状

地区の沿岸には、大型海藻のカジメ類（アラメおよびツルアラメ）やホンダワラ類で構成された藻場が広がっており、特に前者が多いのが特徴である。藻場の面積は、平成元年頃に 337ha に及ぶ（第4回自然環境保全基礎調査（環境省,1994））。

しかし、平成25年の夏の猛暑に、30℃以上の高水温が1週間程度続き、その影響で藻場の主な構成種であったカジメ類がほぼ枯死し、ホンダワラ類が低位水準で僅かに残存するだけとなった。

ひびき地区の主な漁業は採貝藻で、総生産額の73%を占める。この藻場の衰退は、採貝藻漁業の重要資源であるアワビ・サザエ・ウニ等の餌の“質”の低下を招く。また、隠れ場機能の低下による漁獲圧の増加で、アワビのサイズが小型化するなど、磯根資源に悪影響を及ぼしており、藻場の回復が喫緊の課題となっている。

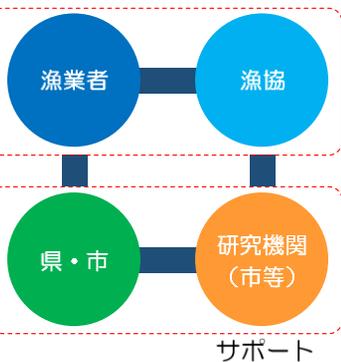


組織の設立及び活動方針

上記の課題から、地区の漁業者が中心となって、藻場の回復促進を目的とする「下関ひびき藻場保全グループ」を平成25年度に設立した。

組織の体制は漁業者主体。下関市栽培漁業センターなどの研究機関のサポートを受けながら取り組みを進めている。

活動組織



●藻場の回復を促進させるための方針

母藻の投入	アラメの種の供給不足を補うための、母藻投入
ウニの除去	再生エリアの藻場回復を阻害するウニの徹底除去
モニタリング	定点を設け、定期的に被度を観測し、効果を検証

藻場の回復を促進させる

(1) 母藻の投入

母藻の投入は、衰退したアラメの種不足を解消する目的で実施する。方法は、成熟期の10月下旬にアラメの葉部と石を網袋（アサリ袋や野菜収穫袋）と一緒に入れ、船上から投入する。

設置場所は、水深3~6mにあるかつてアラメが繁茂した箇所で、事前にエリアを選定し、年間100~150袋を投入する。

なお、母藻とするアラメは、市が購入・配布する島根県隠岐諸島産のものを入手し、活用している。



(2) ウニの除去

ウニ（主にムラサキウニ）の除去は、上記の母藻投入エリアを含む再生エリアで実施する。

方法は、素潜りで手カギを使ってウニを採捕し、金ザルに一定量入れ、海面に浮かべた桶に入れ、最後に船に桶を積み込み、陸揚げする。陸揚げしたウニは、漁港敷地内で、ある程度風化するまで野積みし、その後、畑の肥料にするなど適正に処分する。

なお、除去作業においては、事前に採取場所を決めて、構成員でまとめて活動を行うよう配慮している。



活動の効果と課題

上記活動を行った結果、取組を本格化した平成28年度冬季に、ホンダワラ類だけでなく、カジメ類の繁茂も確認できるようになり、30年度には被度50%を超えた。

ただし、当グループが最も期待をよせるカジメ類の生育は、令和元年に再び被度が減少するなど、未だ不安定な状況でその回復促進が課題となっている。今後も、活動を継続し、藻場を回復促進させるための効果的な手法を検討しながら、取組を進めたい。また、高齢化にある当グループにおいては、後継者の確保・育成も今後進めていく必要がある。

